

15. 甲状腺シンチで発見された唾液腺 Oncocytoma の一例

後閑 武彦 小須田 茂 田村 宏平
(国立大蔵病院・放)
向井美和子 (同・病理)

症例は69歳の女性で昭和37年より慢性甲状腺炎を指摘されており、昭和55年の $^{99m}\text{TcO}_4^-$ による甲状腺シンチにて左耳下腺部に軽度の異常集積が認められた。

昭和60年12月、 $^{99m}\text{TcO}_4^-$ によるRIアンギオグラフィを施行。静注後12秒で左耳下腺腫瘍巣(約3×2cm)にRI集積が始まり、時間の経過とともにRI集積が増強、10分像では明瞭なhot spotを示した(腫瘍・軟部組織比は11.6)。レモン負荷によりwash-outされなかった。ほぼ同時期に ^{123}I および ^{201}Tl スキャンを施行。腫瘍巣に一致して強い異常集積を認めた。生検にて耳下腺原発のOncocytomaと診断された。若干の文献的考察を加えて報告した。

16. 聴覚刺激による ^{123}I -IMPの脳内分布の変化と局所脳血流量の測定

小田野幾雄 賈 少微 酒井 邦夫
(新潟大・放)
土屋 俊明 (同・歯・放)

I-123 IMPと回転型ガンマ・カメラを用いて正常人の安静時のrCBFを算出した。wholebrain mean CBFは $49.5 \pm 4.7 \text{ ml}/100 \text{ g 脳}/\text{min}$ であった。聴覚刺激により左側頭葉皮質とくにWernicke言語中枢野のI-123 IMP集積が有意に低下した($p < 0.05$)。また前頭葉皮質の集積も低下する傾向がみられた。I-123 IMPによるrCBF測定値は聴覚刺激によっても十分に変化し、病的脳のみならず正常脳においてもI-123 IMPの集積はrCBFを示さない場合がある。I-123 IMP脳シンチを施行する際には、耳栓や目隠しをして、できるだけ周囲の静寂を保つ必要がある。

17. アルツハイマー病のI-123 IMP SPECT

百瀬 敏光 西川 潤一 小坂 昇
吉川 宏起 飯尾 正宏 (東大・放)
清水 輝夫 (同・神内)

われわれは第25回日本核医学会総会において、アルツハイマー病患者の大脳皮質病変がI-123 IMP SPECTにより検出されることを報告した。検出された病変部はIMP集積低下域として描出されるが、集積低下は、(1)大脳皮質の局所的萎縮、(2)機能低下により生じうる。今回、われわれは前者の影響を除くため、コントラスト分解能が高く、萎縮部の描出に優れたMRIにより未だ萎縮がごく軽度の2名のアルツハイマー病患者を選び、I-123 IMP SPECTのearly scan(30分後)とdelayed scan(5時間後)を施行し、局所IMP集積の変化について検討した。結果は、56歳女性においてearly scanで両側皮質連合野で高度の集積低下がみられ、delayed scanで病変部への再分布が認められた。46歳女性においても病変部への再分布がみられた。再分布は神経細胞の機能低下を反映していると考えられるが、機序については今後さらに検討が必要であると思われる。

18. 脳原発悪性リンパ腫の ^{67}Ga シンチグラフィ

猪狩 秀則 小野 慈 野沢 武夫
松井 謙吾 (横浜市大・放)

脳原発悪性リンパ腫は比較的まれであるが過去10年間に5例経験したので ^{67}Ga シンチ像を中心にCT所見、臨床像を併せ報告する。

^{67}Ga シンチは5例中4例、脳シンチは5例中3例、CTは5例中4例に施行された。年齢は15~67歳で全例女子であった。症状は頭蓋内圧亢進症状と巣症状であった。腫瘍の局在部位は脳梁、前頭葉が多かった。組織型は組織診の得られた4例全例Non Hodgkin lymphoma, diffuse, large cell typeであった。 ^{67}Ga シンチは4例中3例で陽性、脳シンチでは3例全例陽性、単純CTではiso~slightly high densityを示し造影後では著明な造影効果があり周囲に軽度~中等度の浮腫がみられた。 ^{67}Ga シンチ集積陰性例は開頭生検後でステロイドを多量に使用しており、それが陰性となった一因とも考えられた。